主催／朝日小学生新聞　朝日中学生ウイークリー　共催／出光興産株式会社

出光

この出張授業は「セーフティドライブ」をテーマに事故のない車社会を目指し、充実したカーライフを送るよう取り組んでいる出光興産の活動の一環です。

出張授業
夢を実現するために チャレンジ

なんでもやってみよう！

レーシングドライバー 太田哲也さんの「“生きる”をあきらめない」メッセージ

ぼくらのチャレンジし続ける勇気が どんな体験も夢へのチャンスにかえるんだ

レース中に巻き込まれた事故で生死の境をさまよう重症を負いながらも、手術とリハビリを重ね、不屈の闘志で再びサーキットに立ったレーシングドライバー太田哲也さん。夢を、生きることをあきらめない太田さんの講演は日本中の人々に感動を与えています。小学生に向けた出張授業『夢を実現するために チャレンジ』は今年で３年目を迎えました。夢に挑み続ける太田さんの生きざまは、子どもたちに勇気の輪を広げています。授業を実施した２校の様子を紹介します。

全治３年の重傷 誰かのために生きることが支えに

授業では、はじめに太田さんのこれまでの道のりをビデオで紹介。拍手や手拍子のなか、太田さんが手をふりながら登場しました。

全身におった大やけど見て絶望した僕は、ふらふらと病院の屋上に上りました。しかし、あやまって転落をしないように金網は天井部分まで張られています。「死ぬことさえも許されないのか」。そう思ったとたん、「病院にはつらい気持ちの人がたくさんいるんだ」。まわりのことが目にとびこんできました。そして、「わたしたちのために生きて」と励まし続けてくれている家族のつらさに気づきました。

家族の笑顔と「誰かのために生きること」を支えに、医師から宣告された「全治３年」という途方もなく長い時間、そして23回の手術に挑みました。

もうマイナス点は数えない 失敗してもあきらめない

炎上場面を見たのは、事故から一年以上たってからです。炎に包まれて、それでも立ち上がろうとする姿に「ゼロからのスタートなんだ！」。新しい人生を与えられた気がしました。過去と今を比べたり、まわりと自分を比べたりするマイナス点だけを数えることをやめて周囲に目を向けました。庭を見ると花が咲いている。木の実を小鳥がついばんでいる。これまで気づかなかった「小さな喜び」をたくさん発見しました。

「何かを始めよう！」と、まずは車の運転に挑戦してみました。最初はうまくいきません。家の門に車をぶつけたこともありますが、でも、毎日練習していると、不可能だと思っていた細かい操作ができるようになっていきます。サーキットへも行きました。コースを走るうちにレーサーとしての感覚が戻ってきて、恐怖心は消えていました。しかし、同時に「プロとしては、もう通用しない」とも分かりました。

何をしたらよいか考えました。ぼくは、さまざまなことを悩みぬき、人にはできないたくさんのことを体験してきました。これを本に書いて人に伝えたらどうか。社会で通用する作家にならなくてはと、がむしゃらに文章を書く勉強をしました。失敗しながら、それでも必死に本を書き上げました。

「夢」への近道は 何でもやってみること

運がいい、運が悪いとよく言いますが、どんなことでも「やってやろう！」。そういう人がチャンスをつかむのだと思います。頭の中で考えているだけではダメですよ。やってみてダメだったら、そこでまた、次に何をすればよいかを考えればいい。ぼくは、事故に巻き込まれるというつらい体験も、他人から見れば無駄だと思われる体験もしています。しかし、どんなつらいことでも、無駄な体験を重ねても、けっしてあきらめずにチャレンジし続けることで、人生は輝くのだと信じています。

みなさんは「めんどくさい」とか「無理」という言葉を口に出してはいませんか。「夢」に向かう近道は、どんなことでもやってみること。とりあえずやってみることで、自分が楽しくてたまらない得意なことや、自分を社会に生かせる何かを見つけてください。まずはチャレンジ！

Photo :kenji sekine

太田哲也（おおたてつや）

1959年11月6日生まれ。自動車評論家・レーシングドライバー。

4年連続フェラーリでル・マン24 時間レースに出場。日本一のフェラーリ遣いの異名をとる。1998年全日本GT選手権で事故に巻き込まれ瀕死の重傷を負い、再起不能といわれながら、23回の手術とリハビリを繰り返し、事故から2年半後にサーキットに復帰した。

復活までを自らがつづった著作『クラッシュ』『リバース』は、スポーツドキュメントとしては異例のベストセラーになり映画化もされる。

現在は自動車評論家として多数の連載をもつ。

2005年６月に出版した『生き方ナビ』は、学生、教育関係者から絶大な支持を集め、小中高で総合学習の教材としても使われている。

ライフワークとして若い世代に「チャレンジする素晴らしさ」を伝える社会貢献活動「KEEP ON RACING」（ホームページhttp://www.keep-on-racing.com）も主宰。

出張授業 学校レポート No.1　**沖縄県那覇市立前島小学校**　4・5・6年　児童113人＋保護者の皆さん

親子で“チャレンジ”だお父さんお母さんも授業に参加

「かっこいい」「燃えにくい布なんだって」「かぶってごらん」。初めて触れるレーシングスーツやヘルメットに、興味しんしん。休み時間、展示品を取り囲むみんなは笑い声がたえません。学校があるのはカタバルと呼ばれる塩田の干潟を戦後に埋め立てた場所。それほど広くない校区は、那覇市きっての繁華街・国際通りの近くにありながら、地域ぐるみで子どもを見守る温かさが残るといいます。「めんどう見のいい高学年たちは、小さい子たちからにいにい・ねえねえ（お兄さんお姉さん）と慕われています」と校長の田端一正先生。

日曜参観のこの日は、お父さんお母さん方も会場で熱心に耳を傾けていました。「引っ込みじあんだと思っていたうちの子が、真っ先に質問の手を上げたのにはびっくり」と、５年生男子のお母さん。「自分自身が何か挑戦したくなりました。子どもたちのやってみようという気持ちを、もっと応援しなくては」と話すのは６年と４年の女の子のお父さん。「いやなことから逃げないようにしたい」「サッカー選手になる夢をあきらめません」と、みんなは自分たちから感想を話してくれました。この日の夕食どきには、熱く語り合った家庭も多かったことでしょう。

出張授業 学校レポート No.2　**福島県いわき市立好間第二小学校**　4・5・6年　児童120名

無駄な体験なんてない次の夢へ…心の通いあった授業

講演のあとの質問コーナーでは、それまで静まり返っていた会場がうそのように、一斉に手が上がりました。「尊敬する人は誰ですか?」。会場となった音楽室には真っ赤なスポーツカーの写真パネルが飾られています。「この車を創ったエンツォ・ファラーリさん！　レースを愛し、レースのためだけの車を創った人なんだ」。「太田さんにとって、これからの夢はなんですか?」「思いついたことはどんどんやっていくよ。きみは、どんな夢をもってる?」「うーん。お医者さんになりたい」。ひとつひとつ、ていねいに答える太田さん。熱気を帯びたやりとりが展開されました。

最後に６年生代表の女の子が感想を発表。「“自分は生きている意味があるのか。の言葉が印象に残りました。それほど事故は苦しく悲しかったのだと、命はとても大切なものだと改めて感じました」。大きくうなずく太田さんに「ありがとうございました」と、あいさつをするみんなの声は、ひときわ力がこもって聞こえます。総勢120名が集うには、この音楽室はちょっと手狭です。広い体育館があるのですが、現在耐震工事中で使うことはできません。東北大震災が起きてから、プール開きや運動会などの学校行事も次々と中止に。体を寄せ合いながら話しを聞くみんなの真剣な表情には、太田さんとエールを交わすような温もりがありました。そして、見送るときの元気な拍手と笑顔。どの笑顔にも、たくましさがキラリと感じられました。

出張授業『夢を実現するために チャレンジ』で、講師の太田哲也さんは子どもたちに交通安全の呼びかけをしています。

「交通安全のポイントは『青信号でも渡るな』。クルマを運転しているのは人間です。残念なことですが、いろいろな人がいます。考えごとをしていたり、眠たかったり。青信号であってもつっこんでくる心配があります。青でも信用しないで、まわりを見渡してから渡りましょう。自分の目で安全確認をすることが大切です。

クルマは友だちであり、人生のパートナー。将来、カーライフを楽しんでほしい。クルマに乗ると自由が手に入れられます。いろいろなところへ行けるようになります。その楽しみを味わってもらうためにも、交通安全に気をつけてください」

出光は人もクルマも安全な社会を目指します。

出光 セーフティードライブ